

ことばの重み

— 鷗外の謎を解く漢語 —

小島憲之



新潮選書

「古稀を過ぎた新人」の私は、この書により、初めて学界でなく世間にもものをいうことになった。上代以来の日本文学の中の片々たることば、その一語一語の性格を確かめる作業を、私は一生のつとめとしてきた。鷗外の漢語も例外ではない。いわば「顕微鏡的」なその学問の方法に、「何と瑣末な……」と思われるむきには、こう答えるしかない。「いったい学問に関して、どこまでが瑣末で、どの程度なら瑣末でないのか」と 著者

ことばの重み

— 鷗外の謎を解く漢語 —

小島憲之

新潮選書



ことばの^{おも}重み〈新潮選書〉
^{おろかい} 鷗外の^{なぞ}謎を^{かんご}解く漢語

© Noriyuki Kojima. Printed in Japan 1984

昭和五十九年一月十五日 発行
 昭和五十九年九月二十五日 五刷

定価 八三〇円

著 者 小 島 憲 之

発 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 東 洋 印 刷 株 式 会 社

製 本 植 木 製 本 株 式 会 社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

発 行 所 株 式 新 潮 社

電話 業務部(03)二六六一五一
 編集部(03)二六六一五四
 振替 東京 四一八〇八番

(乱下さい・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付)
 送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600256-6 C0381

ことばの重み――關外の謎を解く漢語――目次

第一 「赤野」 『航西日記』にみる鷗外の「剽窃」……………7

なぜ「赤ちゃん」なのか
「童山赤野」のアデン港
先輩成島柳北たちの日記
『米欧回覧実記』まで
東京「久米美術館」にて
『米欧回覧実記』との検
証
剽窃か本歌取りか
『舞姫』作者の心のうち

第二 「望断」 それは誤読の発見に始まった……………35

明治の空、そして独楽
漢語と和製の漢語
ルー
ドイツヒ二世と新白鳥城
誤読——わたし自身の場合
どこまでが瑣末なのか

第三 「繁華」 青森の花柳の巷はいつ焼けたか……………61

青年徴兵副医官の旅
新潟七十二橋の夢
漢和辞
典の丸かじり
十月三日と「火後」

第四 「青一髪」 東の詩人頼山陽と西のワグナー楽劇……………81

鷗外読書圏の中国詩人
出典——果てしない広野の

第五	「 エルベ 易北」『独逸日記』、魂 たましい 飛ぶ先の女性たち……………	103
----	--	-----

小径　柳北を経て蘇軾の詩へ　ワグナーの「青
いひとすじ」　合唱曲『鑑真和上東征賦』

誤読が「通説」となったとき　「サントニ珊瑚尼」の命名者
鷗外　ドレスデンの「マリンナ童貞女」　日本人留学生と
ドイツ女性

第六	「 ひ 妃嬪」ベルリン七首と碧燈車上の客……………	125
----	--	-----

百年後の東ベルリン訪問記　実体験と竹枝歌ちくしかのあや
「ツインシロウキテル試衣娘子」のむかしいま　牡丹の淡白にも「冷淡」
の表現

第七	「 い 涙門」舞姫エリス、『還東日乗』の虚実像……………	153
----	---	-----

帰国の旅の鷗外と石黒忠憲　「相遇」を深読みした
誤り　長崎好眺楼ベムルの娘たち

第八	「 こ 葫蘆」わたしを悩ませた『小倉日記』の語群……………	171
----	--	-----

第九

「春^{うすつ}く」

「うた日記」のあや——万葉語と漢詩語

左遷の日記、その耳学問と実際　中国「近世語」と
の最初の出会い　水滸伝より牡丹燈籠まで

.....
189

第十

「暗^{あん}秋^{しゅう}」

大正天皇詩集とハルピン駅頭の伊藤博文

.....
215

「暗黒」と「暗殺」との距離　「影の薄い天子様」
の一大詩集　博文、森槐南そして安重根　「暗
愁」——漱石の用例まで

第十一

「今^{こん}夕^{せき}」

ことばは揺れる——失われた明治の詩囊

.....
237

青年期と晩年の用例の移り　女子大生の正答率は—
四%　「今夕は何の夕ぞ」

あとがき

.....
260

ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語——

第

一

「赤^{せき}

野^や」

『航西日記』にみる鷗外の
“剽窃”

なぜ「赤ちゃん」なのか

一語の持つ重みということについて書き綴ってゆこうと思う。

日本上代文学と中国文学との関わりについて、その一語一語の「語性」——語の性格——を見定めることを、わたしは自らの学問の基礎としてきた。そのわたしが標的^{ターゲット}を、明治のことば——とりわけ森鷗外の使った漢語、漢詩語に絞ったのはなぜか。とりたてて異例に属することでもあるまいとわたしは考えているが、そのことも、章を追うごとに、明らかになってゆけばよいと思う。話題を「赤」という漢字のことから始めよう。

「赤ちゃん」「赤ん坊」は、新生児や乳児を指すことばである。何をわかりきったことを、と言われそうだが、多年、文化をその背に荷い続けてきたひとつの表意文字、その文字によってつくられた語、語句には、にわかには測りがたいほどの重みがある。なぜ新生児が「赤ちゃん」かといえば、産ぶ声高らかにこの世に生を享けた児の、その肌の色の赤々としていることによるであろう。たしかに、中国の古典、しかもわが上代の官吏登用試験のための必読書ともなっていた『書経』（尚書）の注の、そのまた注にも——これを疏^とという——、「子生ルトキ赤色、故ニ赤子ト言フ」とある。しかし「赤」は、わたしにとっては、そう簡単に通りすぎるわけにはゆかない文

字である。ひどい栄養失調のため、終戦後半年以上も田舎に疎開していたわたしの、愛読書としてカードまでも作った書物は、中国の歴史書『漢書』であった。唐の太宗のもと、そのすぐれた注を作った名高い学者顔師古は、こういつている、「赤子ハ、其ノ新生イマダ眉髪有ラズ、其ノ色赤キヲ言フ」と。赤子についての、中国の学者によるこの二つの古典的な注は、似てはいるものの、必ずしも同じではない。後者が「眉毛も髪もまだ生えない状態で」とつけ加えている点が重要である。

「赤」には、色彩の赤と、なにも持たない、あるいは、まるはだかのという、大きく分けて二つの意味がある。素寒貧の意の「赤貧」、徒手のままで何も手にしていない「赤手」、すあしのことを「赤脚」というなど、いずれも後者の意で用いられることばである。このうち、「赤手」については、鵬外自身が、『航西日記』すなわち西方への船旅の日記に続く『独逸日記』のなかに、ドイツ製の酸漿提燈の不細工さをわらって、「蓋し器械の用盛なる国にては、赤手にて物を製することは段々拙くなるものなり」（明治十八年七月二十七日）という使い方をしている。それらの「赤」は、緑の山に対して赤禿の山と表現する例のように、「眉も髪も生えそろわない、不毛の、むきだしの、はだかの状態」を意味している。

日本上代——大宝二年（七〇二）の戸籍帳の中に、三歳までの男の子を「緑児」、女の子を「緑女」というとみえる。もっとも、これは法律的な規定であって、漠然と乳幼児をいうこともある。友人佐竹昭広君は、文献以前の古代語ミドリは色名をあらわす語ではなく、「新芽」「若枝」の意をもつという。三歳までといえば、「赤子」の段階をやや過ぎて、ういういしい新芽のごとき幼児を指す、と考えてよからう。

わたしは、この二、三年ほど前から、鷗外が使った「赤野」ということばにかかずらっていた。漢籍などをまれに読む際にも、「赤」の字を上にかぶらせた語がまず目を射る。それというのも、鷗外が使った「赤野」ということばを、彼の漢文体の日記『航西日記』の例以外には、なかなか発見することができなかったからである。わたしは、いくらかかたくなになっている自分のことをひそかに感じながらも、唐代以来の漢詩をはじめとして、鷗外など明治の学生たちが愛読した明末清初の小説、雑記の類、そして、それらからの引用語も多いと思われる幕末から明治にかけての日本の小説類へと、「赤……」のことばを追い求めた。「赤野」の語例は、みえない……。この語は果して漢語かどうか、それとも日本人がつくった、いわゆる和製の漢語なのか、あるいはまた、鷗外自身の造語なのか。

結果を先にいえば、「赤野」の一語を追い続けることによって、わたしは、鷗外像の思いもかけない一面に接することができた。しばらくは、読者の煩わしさをおそれることなく、その経過を示してゆくことにする。

ともかくも、その「赤野」という語の出現する『航西日記』について、まずは簡単に触れておかねばなるまい。世上名高いこの日記には、「赤野」以外のことばを取り上げようとする際にも、しばしば登場してもらうことになりそうだから。

明治十四年、弱冠数え年二十歳で、東京大学医学部の業を終える前に、鷗外が抱いていた熱望といえは、あくまで首席卒業を果すことにあった。首席、あるいは次席卒業がそのまま官費による欧州留学の榮につながっていたためである。しかしその夢はあえなくも破れた。鷗外は同期十五名の卒業生中最年少ではあったが、その席次は八番目。これでは官費留学など夢のはるか彼方

にある。

鷗外森林太郎は、その後三年、失意の陸軍副医官として、官命によって関東、東北、北陸などを行脚することになる。その辺地行脚の前半の任務は、運命のままに、いまはもう廃語となつてしまつた、『徴兵検査』に立ち合うことであつた。北陸など僻遠の地を^{ちまた}経めぐりつつ徴兵業務に従うこの青年軍医が、必ずといつてよいほど、その土地土地の花柳の巷を主題とした漢詩を詠んでいることなど、一般にはあまり知られていない話もあるが、いまは後に譲らざるを得ない。

失意のために、あるいはそうした漢詩のとおり、また同行した二十数名の上官たちの眼をぬすんで田舎花街の夜をさまよつたかもしれない鷗外に、やがて大きなしあわせがもたらされる。

明治政府の性急な海外先進国からの文物・制度の摂取という時勢の要求が背景にあり、その上、周囲のあたたかい好意、情実や、更にまた陸軍と文部省との微妙な力関係などが重なり合つてのこぼれ幸い、といつてもよからう。明治十七年八月二十三日、東京を発ち横浜へ。官費留学生として、鷗外は晴れて洋行し、ドイツへ留学することになる。彼の作になる漢詩の一句を借りれば、夢の中にまで乗つた「夢に駕す長風万里の船」に現実^{じやうじつ}に上船することができたのである。

思えば、その『洋行』という語も今日ではすでに死語と化しているが、それはともかく、彼がベルリン到着の十月十一日までの船旅の様子を記したのが『航西日記』である。——読者諸君よ、この当時、客船と鉄道による世界早廻り旅行をテーマとした一種の冒險夢物語『新八十日間世界一周』（明治十一年刊・川島忠之助訳）という名の翻訳小説が、いまにいうベストセラーになつた時代であることに記憶をとどめられたい。

「童山赤野」のアデン港

鷗外など前途洋々たる留学生たちを乗せたフランス客船メンザレー号は、横浜出港の八月二十四日から一カ月余の航海を続けて、九月二十六日、紅海の喉のところに当るアデン港に到着した。その日の日記を次に掲げる。(原文は漢文体であるが、仮にそれを訓み下し、句読点と訓みがなをつけた。また、以下の引用も、なるべくこの形によることとし、いちいちことわらない。)

二十六日。亜丁港ニ至ル。錫蘭ヨリ此ニ抵ルコト二千百三十五里。港ハ英人ノ開ク所、紅海ノ咽喉ナリ。西南ハ海ニ面シ、赭山繞ル。四時雨少ク、満目赤野、寸緑ヲ見ズ。土人褐色、頭髮黃枯ス。鼻ニ金環ヲ穿チ、衣ハ半身ヲ掩フ。亞刺伯音ヲ操リ、雜フルニ英語ヲ以テス。奉ズル所ハ皆回教ナリ。土人來リテ貨物ヲ売ル、駝鳥ノ羽最モ美ナリ。聞クナラク此ノ地ニ貯水池有リ、以テ天水ヲ貯フト。速爾門王ノ創リシ所ナリ。往キテ觀ント欲スレドモ果サズ、微恙アルヲ以テナリ。光明寺三郎ニ邂逅ス。三郎ハ外務書記官為リ、巴里ヨリ歸ル者ナリ。午後六時開行ス。熱甚シク、寒暑針九十度。詩有り。

万里舟過ぐ駭浪の間、征衫此に來たりて涙斑を成す。童山赤野青草無し、豈に風光の故山に似たる有らんや。

万里舟過駭浪間。征衫來此淚成斑。童山赤野無青草。豈有風光似故山。

このあとに更に漢詩一首が加わり、「此ノ日郷書ヲ発ス」の一行でこの日の日記は終る——「郷書」は故郷へのたより。ただし、鷗外のこの使用例が漢語のそれを誤ることにについては、第十一章に触れる——。今日の読者にとつては見慣れない語もあるう。二、三の現代語訳を加えておく。引用文二行目土人の肌色は褐色で、そのあとの「黄枯」は、黄色くすがれ（縮れ）ているといった状態。「微恙」は文字どおり、軽いやまいをいうが、気分がややすぐれずと解してよい。「邂逅」はたまたまめぐり合うことであるが、本来、中国の古代語。午後六時の「開行」は出帆、漢詩のなかの「駭浪」は、わきたつ大浪の意、「征衫」は旅ごろも、「童山」は不毛の山、古代語。

ここで問題の「赤野」が二箇處に見える。紅海の「咽喉」——入口に当るアデン港附近の「満目赤野、寸緑ヲ見ズ」という風景の中に現れ、また詩の第三句の「童山赤野青草無し」に再び現れる。この「赤野」が、さきにあげた「赤手」・「赤脚」などに通じる語であることはいうまでもない。たとえば、中国明代の百科辞典といふことのできる『古今類書纂要』にも、

「赤地」——地空シク尽キテ物無キヲ赤地ト曰フ（卷二、地理部）

とあり、そこでいう「赤」の意に同じく、赤はだかの何も無い野がすなわち「赤野」である。鷗外が「寸緑」——ほんのわずかな緑の「青草」も無い野の様子を「赤野」と表現していることでもそれは明らかである。試みにこのことを諸橋轍次氏の『大漠和辞典』、通称『大漠和』でひいてみる。「赤野」はたしかにある。けれども、その意は、「地名。古の玉の産地」として、その